



海外の生活で失うもの、 得るもの

トロント大学 名誉教授

西里静彦

(にしさと しずひこ)



日本らしさ

英語には「貴方を日本から連れ出すことはできるが、貴方から日本を連れ出すことはできない」(We can take you out of Japan, but we cannot take Japan out of you.)という私の好きなことわざがあります。一昨年の東日本大震災の折、日本人の礼儀正しさ、道徳観、冷静さ、勤勉さは世界の感嘆と羨望の的になりました。そのような日本人像は海外にいる者の誇りであり、皆その「日本らしさ」の存続を希求しています。

これに対して「あの人は悪い意味で日本人離れている」という、日本人らしさを失った人を見たことがありました。1961年、留学試験のオリエンテーションにアメリカの試験官二人とアメリカ留学から帰国した日本人が話題提供者でした。アメリカ人は二人ともテーブルに向かい礼儀正しく座っていましたが、その日本人は椅子から西部劇もどきに両足を靴のまま前のテーブルにあげ、われわれに対峙しました。これが「日本人離れ」の鼻持ちならない例です。

海外在住が長くなると、いつの間にか日本語がおかしくなり、「日本らしさ」が古びてきます。「日本らしさ」を保持したいという私の願い、どうなるのでしょうか？

古い日本らしさ

私が留学で日本を発つ前に「君は酒も飲めない、コーヒーも飲めない、牛乳も飲めない、タバコもすえない、ダンスもできない。アメリカでは苦勞するよ」といって

くれた先生がいました。それはいかにも昔の日本的な忠告でした。

また、戦時中に育った者の特徴として、「食べ物を残すことができない、残すとホストに申し訳ない」という心性があります。留学途中に立ち寄ったサンフランシスコで、アメリカのペンフレンドは私が飲めないコーヒーを大きなカップに並々と何回となく注いでくれました。私は「この調子だとまらず生きて日本には帰れまい」と思いつつも我慢してそのつど飲み干しました。同じようにタバコをすっている日本の友人に、タバコアレルギーを持つ私は「やめてくれ」とは言えません。このような調子だといろいろ問題が生じます。

ペンフレンドの母は二戸建ちの家を持っており、空いている一つを私に提供してくれました。1961年頃の日本は、湯は水道や井戸からの水を沸かして使い、個人宅には電話が無い時代でした。翌朝、シャワーを浴びるべく、温水の栓をひねってしばらく待っても湯は出てきません。当時の生活環境から、湯が出ないのは当たり前だと早合点、どうせ湯が出ないなら冷水の栓を使うのが良いと思い、それから滞在中の三日間、毎日冷水のシャワーを浴びました。涼しい9月のサンフランシスコの最後の日、もう一度温水の栓をひねったら、熱い湯が出てきました。しばらく居住者のいなかった家で熱い湯がすぐ出てこなかっただけだったのですが、しかし当時の私はそ

れを知らずに節約の観点から「出ないなら冷水の栓を」と決めていたのです。また、留学先の大学のキャフェテリアでは、目玉焼きは一つでも二つでも同じ値段でしたが、それを知らない私は一年間ずっと一つだけ注文していたこともありました。さらに、ソビエトアカデミーに講演で招かれた1989年12月、宿舎のシャワーは冷水、共産国はこういうものかと早合点して毎朝凍てつくシャワー。宿舎を出る日、朝7時20分から10分間だけシャワーは湯が出ると知らされました。何故それを最初にきかなかったのでしょうか？これらは相手に迷惑をかけないように自分で判断して事を解決しようという、日本的な思考による災いでした。

外国生活における努力

生まれて以来の日本語の生活から外に出るには大変なストレスが伴います。かの有名な夏目漱石が『文学論』の序に「倫敦（ロンドン）に住み暮らしたる二年は尤も不愉快な二年なり。余は英国紳士の間であって狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あわれな生活を営みたり」と著したように、漱石も、英語の生活では大変苦勞したのでしよう。

私より一世代上の一世は自動車をミシンといい、州知事を州長といい、私の世代に下がると、「いびき」を「寝びき」と言い、「うのはな」と「ゆのはな」の違いがわからず、「上気」を「うわ

Profile — 西里静彦

1959年、北海道大学文学部（実験心理学）卒業、1961年、同修士課程修了。1966年、ノースカロライナ大学（UNC）大学院修了（Ph.D.）。国際計量心理学会元会長、サイコメトリカ元編集長、アメリカ統計学会フェロー、行動計量学会名誉会員、UNC心理学同窓会 Distinguished Alumnus。

き（浮気）」と発音し、なにやら「もうろう」したと思っています。しかしみな一生懸命生活に励んでいるのです。

日本らしさの片鱗

このように生活が変化しても古い日本人の名残は心の底にあります。東日本大震災に際しては、トロントの日系二世、三世の人々が義援金の募集に日本人の美德をかかげて、「このように素晴らしい日本人を助けよう」と張り切ったとのことでしたが、私の反応は「何で自慢するのか？」でした。また昨年、トロント市の保護住宅の管理者たちのスキャンダルで役員総辞職の勧告が出たとき、役員の中の日系女生は自分は悪いことをしていないと最後まで辞職を拒みました。なぜ責任を取ってすぐ辞職届を出さないのか、歯がゆい思いでした。

日本らしさの変化

しかし私にも変化は起こっていました。トロントでお茶会に招待されると、私以外の20人がコーヒーを注文しても、「私だけ紅茶をください」と言えるようになりました。世界的に有名な日本人の貯蓄の習慣は早い時期に姿を消し、給料が入ったら、車を買、家を買、旅に出かける北米人の習慣が身につきました。東日本大震災の時、センセーショナルなCNNの放送でアメリカの専門家は日本に批判的、かつ現地に派遣された人の誤った通訳があり、私は夜も眠れず、とうとう家内に薦

められてCNNのアトランタオフィスに長い抗議文を書きました。丁寧な返事が来ましたが、同時に昔ならあれほど強い抗議文を書かなかったらという反省にせまられました。

私の家では日本語を話しません。たまに「日本語が上手ですね」と言われるとますます心配になります。私の書斎の英和辞典は英語の単語を調べるためというよりは、たとえば“filibuster”という英語に対する日本語は「議事妨害」でよいのだろうか、とか、“bat”は日本語でなんと言ったろうか、辞書を見て、ああ「こうもり」だった、というようなことに使います。もちろん、耳新しい英語の言葉にもしょっちゅう出会いますが、特に必要でない辞書など引かず、二、三度お目にかかって言葉の意味を知る生活の知恵ができました。

天秤のバランス

訪日の際、ホテルのテレビで英語の発音がおかしいと、奇妙な感じがするようになりました。コマーシャルで「ジョンソン エンドジョンソン」と聴き、耳を疑いました。どうして「アンド」が「エンド」になるのでしょうか？宝石会社の「デビアス」も「デビアース」のことでした。皆様は、このような「些細」な違いを普段気にしないと思います。

この感覚は日本人が海外で「英語の僅かな違いをわかってくれない。外国人は頭のめぐりが悪い、融通が利かない」とする主張に通じます。しかしたとえば“heart”と“hurt”は日本語では共に「ハート」ですが、「心」と「苦痛」が僅かな発音の違いで実際に区別されているのですから、「頭のめぐりが悪い」のでもなし、声を大きくして解決する問題でもありません。一般に私たちの英語は大学

町では通じますが、大都会の下町に行くと俄然通じなくなることがあります。これはある程度国際経験の問題で、住民が世界中から集まっているトロントでは「英語」がよく通じます。

海外で身につく癖

海外の生活で変わる例として日本人が身につけるゼスチャー（ジェスチャー）があります。「あの人は何処に行きました？」という質問に「東に行きました」と答えるだけでよいところを、東に指す動作をそれに加えることなどです。知らぬ間にゼスチャーが会話に入るようになったある日、家内にそれは余計なのでやめたほうがよいと言われて驚きました。

これは礼儀の問題にもつながります。「その人はどこにいますか？」と大きな会場できかれたとき、「あの階段の二段目に立っている」と言えば十分ですが、そう言いながら指をそちらに向けて指すと、その周りの人々は指をさされてあまり良い気がしません。英語などの第二言語で生活していると、このようなことが自然に多くなるので、心して避けなくてはなりません。

アメリカ人は「どうでもいいさ」という代わりに、首を縮め両肩を上げ、下に下げた両手を心持ち上げて手を開く、というゼスチャーをします。日本人がこのゼスチャーをすると「日本人離れ」の感じがして私は嫌いです。

もう一つ北米で身につけた習慣は、誰かに体が触れたとき、こちらが相手にぶつかっても、相手がこちらにぶつかっても「エクスキューズミー」と言うことで、これは反射的に出るようになります。アメリカでは「エクスキューズミー」が普通ですが、カナダでは、どちらかというと、「アイアムソーリー」になります。この習慣の

延長で、私は車を運転していて、向こうの車が、こちらの車の邪魔をしても、その逆であっても、とにかく手を挙げて笑顔で「すみません」というゼスチャーをするようになりました。私の家内は、これが私から脱出しない日本の古い殻であるという意見で、家内の口癖は「何時もそうしなくてもよいのに」(You do not always have to please others.)です。しかしこの癖はどうしてもなくなりません。

この逆は、日本を数度訪れた家内に「最敬礼」をする癖が身についたことです。二人で日本を訪れた時のこと、デパートの開店時に従業員がエスカレーターの脇でお辞儀をするのを見て、家内も最敬礼するのですが、私は“*She does not always have to please others.*”と思ひながら、それを見ています。ところが一度、同志社大学で客員教授を務めた時に、長年の知己である山内弘継教授が「先生、今のは学生なんだから最敬礼しなくてもいいんですよ」と私に言ってくれたことがありました。私が訪日すると必要以上に日本的になり、その結果知らぬ間に日本をはみ出します。

日本らしさの行方

自分から日本は出ていかないという確信も、いつの間にか海外の生活が私の人生をすっかり支配し、揺らいできました。それを強く感じたのは、『波に夕陽の影もなく』(佐木隆三著、中公文庫)、

『マリコ』(柳田邦男著、新潮文庫)、テレビ番組『99年の愛、ジャパニーズアメリカンズ』、記録映画『正義の学位：ブリティッシュコロンビア大学(UBC)1942年の日系カナダ人学生』(A Degree of Justice: Japanese Canadian UBC Students of 1942, UBC Library)などに接して異常に強烈な感動を覚えた時です。

人生のほとんどを英語で暮らしたのに、年とともに英語を忘れ、家族とのコミュニケーションもかなわず、過去を背負って亡命した祖国への望郷を胸に寂しく去った主人公の竹内十次郎。日本人外交官と『太陽にかけける橋』の著者アメリカ女性の中に生まれた一人娘で、敗戦後の苦難にもかかわらず強い親日感情を保ちつつ勇敢にアメリカ社会に溶け込んでいったマリコ。雄大なシエラネヴァダ山脈を背景にしたマンザナーの強制収容所の苦しい生活の末、やがて訪れた遠い日本の家族と涙の再会を果たした日本人移民家族。対日戦争のため大学から放校されたUBCの76人の日系カナダ人学生と、70余年後の2012年5月30日に彼らに授与された大学の卒業証書と学位というカナダからの温かい贈り物。これら全てにわが身の人生を重ね合わせての感動でした。その時改めて、自分も祖国をあとにし、いつになっても日常語の英語を外国語と思っている移民の一人であったという自覚を持ち

ました。

知らぬ間に半世紀が過ぎ去りました。よく考えると、それは取り返しのつかない長い年月で、その間実に多くのことを見聞し、私の「日本らしさ」も変化しました。妻Lorraine(ロレーン)、息子Ira(偉良)に支えられた良い人生でした。いつの日にか出版の機会に恵まれるものなら、この「元日本人」の人生の思い出を遥かな国からの追想として綴りたいものです。

さて四回にわたる連載もこれで終わりますが、この格別の機会を与えてくださった『心理学ワールド』の関係者の皆様にはたいへんお世話になりました。心から御礼申し上げます。阿部純一先生ほか編集委員の皆様、きっかけを作ってくくださった恩師・大山正先生、どうもありがとございました。

もうひとつ、2012年には八木昭宏・成田健一両先生の御厚意で再度関西学院大学訪問が実現し、さらに両先生のお力添えで書いた拙著『行動科学のためのデータ解析：情報把握に適した方法の利用』(培風館、2010)が日本行動計量学会「出版賞」を得ました。両先生ほか多くの関西学院大学の皆様に感謝の意を表します。

ペンの走るままに書いた随筆、「日本らしさ」を逸脱したものかもしれません。失礼がありましたらお許しください。

読者の声投稿募集中！

『心理学ワールド』への、ご意見・ご感想をお待ちしています。

投稿は、お葉書・Eメールどちらでもけっこうです。世代と性別をあわせてお知らせください。

●送付先 〒101-0051 千代田区神田神保町2-10 (株)新曜社 第一編集部 morimitsu@shin-yo-sha.co.jp